
どちらか

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
どちらか

【Nコード】
N7432T

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
イスタンブールのお金持ちケマルは一人と結婚するかハーレムにするかを考えていた。彼が幸せの為に選んだのはどちらか。オムニバス小説です。

第一章

どちらか

ケムルはイスタンプルでも有数の金持ちである。

しかしだ。まだ若く結婚はしていなかった。それはこれからの話だった、

次第にだ。結婚を本気で考えるようになっていた。

それでだ。そのことをだ。召使いであるジャアファルに相談するのだった。彼が幼い頃から仕えてくれている非常に頼りになる男である。

その彼に問うた。いい相手がいるかどうか。するとだ。彼はこう答えたのだった。

「います」

「いるんだね」

「はい、ですが」

「ですがってというと？」

「二つの道があります」

ジャアファルは道という言葉を出したのだった。

「二つの道があるのですが」

「道ってというと？」

「一人の方は。非常に美しく聡明でしかもお優しい方です」

「ふうん、完璧なんだ」

「その方と結婚されるのが一つの道です」

そうした意味での道だということである。

「そしてもう一つの道はです」

「もう一人素晴らしい人がいるのかな」

「いえ、一人ではありません」

ジャアファルはここでこう主に告げた。見事な宮殿を思わせる家のこれまた見事な部屋の中でだ。主に対して話したのである。

「何人もいます」
「何人もつていうと」
「ハーレムです」
つまりはだ。それだというのである。
「ハーレムを持たれるということもできますが」
「ハーレムねえ」
「多くの。数え切れない美女を囲われ」
そうしてそれからだと話すのである。
「彼女達と快樂の日々を過ごされるのですね」
「それがもう一つの道だね」
「そうした意味で二つの道があります」
ジャアファルは主にあらためて話した。
「旦那様はどちらにされますか」
「一人が大勢か」
「はい、どちらにされますか」
「両方は駄目だよね」
「こつも尋ねる彼だった。」
「それはないよね」
「どちらかです」
ジャアファルの言葉がぴしゃりとしたものになった。
「どちらかになりますか」
「困ったなあ」
ケムルはそう言われてだ。実際に困った顔になった。
そしてそのうえでだ。ジャアファルにこつ言つのだった。
「わかったよ。それじゃあね」
「はい、それでは」
「こつするよ」
こつしてだ。彼の決断は。

第二章

第二章 一人を選ぶ

ケムルはだ。ジャアファルに大して答えた。

「じゃあ一人にするよ」

「生涯の伴侶とされますね」

「うん、そうするよ」

笑顔で答えたのだった。するとだ。

数日後だった。ジャアファルは一人の楚々とした女性を連れて来た。歳はケムルと同じ位だ。確かに美人で気品にも満ち溢れている。彼女を見てだ。ケムルはあることに気付いた。それは

「その人は確か」

「はい、御存知でしたか」

「あの家の娘さんじゃないか」

ケムルの家と並ぶ裕福な家のだ。その娘の一人である。

「その人だったのかい」

「あちらでも縁談を探していました」

「それで僕と」

「そうです。それでどうでしょうか」

ジャアファルはその美女の横からケムルに尋ねる。

「この方で宜しいですか？」

「いや、少し待つてくれるかな」

「何かありましたか？」

「その人と話したいんだ」

こうだ。落ち着いた声でジャアファルに話すのだった。

「それから決めたいけれど」

「はい、それでは」

こうしてだ。彼はその美女と話すことにした。まずは二人きりになった。

そのうえで屋敷の庭に出てだ。散策をしながら彼女と話す。する
とだ。

まずはだ。美女は名前から名乗ってきた。

「タハミーネといいます」

「それが貴女の名前ですか」

「はい、そして貴女は」

「ケムルといいます」

まずは名前を教え合ってた。それからじっくりと話すのだった。

82

するとだ。その性格は聞いた通りだった。円満でしかも温和である。しかも聡明さもだ。ジャアファルが言った通りだった。まさにジャアファルの言った通りです。

そうして彼女と話してからだ。ジャアファルに述べるのだった。

「彼女にするよ」

「はい、あちらの方もです」

「タハミーネさんもだね」

「旦那様をとのことです」

「いいことだね。じゃあ」

「はい、ご結婚を」

それをだと。ジャアファルは笑顔で述べたのだった。

「されるといいかと」

「そうさせてもらうよ。それにしても」

「それにしてもとは？」

「多くを選ぶよりいいのかな」

考える顔でだ。こう述べたのである。

「その方がいいのかな」

「はい、妻は四人までですが」

イスラムの教えではそうなっているのだ。しかしである。ジャアファルはその教えに書かれていることを主に対してさらに話すのだった。

「その四人を公平にです」

「愛さなければならぬ」

「それは非常に難しいので」

「一人の方がいいんだね」

「そういうことです。ですから一人を愛されることも示されたのです」

「成程ね。よくわかったよ」

こうしてだった。彼は生涯の伴侶を得たのであった。相手は一人であるがそれでもである。彼は二人で幸せな家を築いていくのであった。

どちらか 完

第三章

第三章 ハーレムを選ぶ

ケムルはだ。ジャアファルに対して答えた。

「わかったよ。じゃあね」

「どちらにされますか？」

「ハーレムにするよ」

満面の笑顔で答えたのだった。

「そっちにね」

「ハーレムにですか」

「綺麗な女の子を一杯集めて」

どうするかというのである。

「それからね。楽しくやるよ」

「そうされますね」

「うん、じゃあそれでね」

「わかりました。それでは」

こうしてだった。彼は一人の妻ではなくハーレムを選んだのだった。

何十人も美女を集めてそうして彼女達と遊んだ。しかしだ。

美女同士がだ。問題だった。

彼女達は何かあれば喧嘩をしてだ。嫉妬を露わにした。

ケムルに対してもだ。昨日どうしてあの女のところに行ったのか、自分のことは忘れたのかとくっつかかりだ。引っ掻いたり噛み付いたりだ。

しかもそれが何人もいた。流石に全員ではないが泣く女や塞ぎ込む女もいる。酒を飲んで暴れる酒乱の女もいれば勝手に浮気をする女もいた。

それを受けてだった。彼はたまりかねてこうジャアファルに言った。

「どうにかならないかな」

「どうにかですか」

「もう大変だよ」

あちこちに引っ掻き傷や噛み傷がある。まるで猫にやられた様だ。その痛々しい姿でだ。ジャアファルに対して相談するのである。

「猛獣が何匹もいるみたいだよ」

「困っておられますね」

「見てわからないかな」

これがケムルの言葉だった。

「その通りだよ」

「ではどうされますか？」

「確かに女の子が一杯いるのは楽しいよ」

その快樂はいいというのである。

「けれどね。それでもね」

「それでもですか」

「このままだと身がもたないよ」

こう言うのだった。

「いあ、本当に」

「ハーレムは止められますか？」

「ハーレムを？」

「はい、どうされますか」

ジャアファルは冷静な面持ちでケムルに問うた。

「それでは」

「ううん、確かに大変だけれど」

ここぞでだ。ケムルはだ。

困った顔になってだ。それだった。

苦しい顔でだ。こう言うのだった。

「このままだと身がもたないし」

「ですから。どちらにされますか」

「ハーレムをこのまま持っているかそれか捨てるか」

どちらかにすることになった。そして彼の決断は。

ハーレムをこのまま持っている 第四章へ

ハーレムを捨てる 第五章へ

第四章

第四章 ハーレムをこのまま持っている

ケムルはだ。決断した。

「やっぱり。女の子達と一杯いる方がね」

「その方がいいのですね」

「うん、そうするよ」

こう言うのであった。

「確かに大変だけれどね」

「わかりました。それでは」

こうしてだった。彼はハーレムを選んだ。しかしだ。

状況は変わらなかった。相変わらずだ。

女達の喧嘩や嫉妬、泣きや酒乱に浮気といった悪癖は収まらずだ。

大変なままだった。しかも子供達まで生まれたのだった。

すると今度はだ。女達はだ。

彼よりも子供達の世話に関心がいつてだ。彼の相手をしなくなっ

た。それでいて喧嘩や嫉妬はそのままだった。むしろ子供達の問題

が加わってだ。

どうしようもない状況にだ。さらになつていた。それでだった。

ケムルはだ。前以上に頭を抱えてしまっていた。その彼にだ。

ジャアファルが問うのであった。

「今のお気持ちは」

「最悪だね」

これが今の彼の心境であった。それをそのまま言ったのである。

「どうしたらいいのかな」

「せめてお子様達のことです」

「そうだね。家督を定めてね」

「はい、そして財産の分担を」

「しておこうか。それにしても」

ここでだ。ケムルはぼやいてだ。こんなことを言った。

「ムハンマドが奥さんは四人までにしろと言ったのはね」

「おわかりになられましたか」

「何十人もいたらそれこそ戦場だよ」

それも常にである。休まる暇がないのだ。

「それがよくわかったよ」

「左様ですか」

「本当にね」

項垂れた顔でこう言うのであった。美女が多いからといっても幸せにはなれない、それが彼がハーレムから学んだことだった。

どちらか 完

第五章

第五章 ハーレムを捨てる

彼はだ。決断した。そしてジャアファルにその決断を述べた。

「捨てるよ」

「そうされますか」

「うん、確かに惜しいけれど」

それでもだというのだ。

「このままじゃもたないよ」

「わかりました。それでは」

「じゃあそういうことだね」

「彼女達には充分な手当てをして」

イスラムでは離婚は相手に離縁すると三回言えばそれで足りる。

しかしそれと共にその相手が一生困らないだけの手当てをしなければならぬ。ムハンマドは実は女性のこともかなり大切にしていたのである。当時の観点から言えばかなりのフェミニストだったのだ。

「そうされますね」

「幸いまだ子供はいないしね」

「はい、それでは」

こうしてだ。ハーレムの美女達全員に暇を出したのであった。

そしてそれからだ。あらためてだった。ジャアファルが彼に話してきた。

「それでなのですが」

「それで?」

「あらためて結婚されますか?」

主いだ。こう提案したのである。

「どうされますか、それは」

「そうだね。少し落ち着いてからね」

「それからですか」

「うん、女は今少し遠慮したいからね」

苦笑いと共の言葉だった。

「だからね」

「いえいえ」

しかしだった。ここでだ。ジャアファルは主に対して言った。

「ここはです」

「ここは？」

「早くお相手を見つけるべきです」

「大変な目に遭ったのに？」

「大変な目に遭ったからです」

だからだ。余計にというのである。

「だからこそなのです」

「言っている意味がわからないんだけど」

「女のそうした面を知り」

ジャアファルはいぶかしむケムルに対して話す。

「そのうえで新しい妻を迎えればです」

「いいんだね」

「だからこそです。宜しいでしょうか」

「ううん、そう言つのなら」

「はい、それでは」

「そうさせてもらおうかな」

いぶかしむ顔で話す彼だった。こうしてだった。

彼はあらためて妻を迎えたのだった。その妻とはだ。彼は幸せに過すことができた。女のそうした面を知ったからこそである。

どちらか 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432t/>

どちらか

2011年6月1日22時10分発行